学校法人 兵庫医科大学 広報誌 兵医広報 vol.275 2026 AUTUMN

西宮市のふるさと納税を通じて、兵庫医科大学をご支援いただけます。

受付期間
2026年6月1日～2027年3月31日

この寄付金は、学生の“学びの支援”をはじめとした各種事業に使用いたします。

①学生の学びの支援（フィールドワーク、国際交流、ボランティア、教育 IT にかかる学生負担の軽減、奨学金制度など）
②地域貢献事業
③生涯学習事業
④産官学連携事業

寄付金額の 7 割が本学の活動に、
3 割が西宮市の大学連携施策に使用されます。

西宮市 さとふる
クラウドファンディング
寄付はこちらから

わたしにパワーをくれるもの。

EMPOWER THE PEOPLEのスローガンを掲げ、
医療を通じて人を、
そして社会をより良いものにするために、
日々奮闘する職員たち。
そんな彼らにとって、自身のパワーをみなぎらせるものとは。



中村 望
NAKAMURA NOZOMU
兵庫医科大学
生理学 生体機能部門
助教

早朝、大自然の中で身体の感覚を研ぎ澄ますこと



早朝、大自然の中で「体操」を行うことが、わたしにとって大切な時間です。場所は、阪神間にある神社の一角や、小高い丘にある自然豊かな公園。小鳥のさえずりや木々の揺れる音、森の匂い、木陰から差し込む朝の光に包まれていると、自然との一体感やゆっくりと流れる生命力のようなものを感じます。頭の中の論理的な思考を止め、身体の感覚に集中する。日常のストレスや悩み、こだわりから一度離れ、呼吸を整えていく、いわば「デトックス」のような時間です。体操を終えると身体には心地よい感覚が残り、頭がすっきりします。その日の朝食はよりおいしく味わうことができ、お通じもよくなります。この時間が確実に、わたしに日々パワーを与えてくれています。

兵庫医科大学

［広報誌の送付先変更や配送停止に関するお問い合わせ］
〒663-8501 兵庫県西宮市武庫川町1番1号
TEL:0798-45-6655　MAIL:kouhou@hyo-med.ac.jp

［発行日］2026年10月
［発行元］学校法人兵庫医科大学 総務部 広報課

学校法人 兵庫医科大学 広報誌

兵医広報

EMPOWER THE PEOPLE
心に響く医を、
私たちが
いるかぎり

vol.275
2026 AUTUMN



MAGAZINE

SPECIAL 2
新病院棟が開院！
患者さんから信頼され、選ばれる病院へ

2026年
9月

SPECIAL 1
新病院棟、開院。

新病院棟、開院。

患者さんとご家族、
地域の方々が安心して過ごせるように。
医療を支えるスタッフが力を発揮できる場所へ。
想いを込めた新たな環境が、
ここからはじまります。

新病院棟が担う6つの役割

01 地域の救急・災害医療を支える

災害拠点病院として救急医療体制をさらに強化し、災害発生時にも地域の医療を支え続ける病院を目指します。

02 高度で先進的な医療を提供する

最新設備の導入と診療機能の集約により、特定機能病院として高度で安全な医療の提供を推進します。

03 患者さんが安心して療養できる

患者さんとご家族の視点を大切にし、快適でわかりやすく、安心して過ごせる療養環境を整備します。

04 地域の医療機関と連携する

地域の中核病院として病診・病病連携をさらに推進し、切れ目のない医療提供体制の実現を目指します。

05 未来の医療人を育てる

教育スペースや研究環境を充実させ、次代を担う医療人の育成と臨床研究の発展に貢献します。

06 職員が力を発揮できる

多職種が連携しながら働きやすい環境を整え、質の高い医療・教育・研究活動を支えます。

兵医広報
CONTENTS
vol. 275

新病院棟、開院。 01
新病院棟が開院！ 患者さんから信頼され、選ばれる病院へ 03
EMPOWER THE BATON 05
今月のプロフェッショナル。 07
HYO-INNOVATION 明日の医療を支える、知の挑戦 09
HYO-I FOCUS 気になるあの研究トピックスにフォーカス！ 11
TOPICS 兵医の注目トピックス 13
NEWS 兵医の気になるニュース 15
INFORMATION 法人からのお知らせ 17

新病院棟が開院!
患者さんから信頼され、選ばれる病院へ

IKEUCHI HIROKI × TAKAHASHI HITOMI
CROSS TALK

1972年、兵庫医科大学の付属病院として誕生した兵庫医科大学病院。開学50周年事業の一つとして、2026年9月、西宮キャンパスに新たな病院棟が誕生しました。「Human Centered Hospital―『ひと』が主役の未来型スマート病院へ―」をコンセプトに建設された新病院棟の魅力を、病院長と看護部長に語っていただきました。



病院長
池内 浩基

看護部長
髙橋 仁美

01 | 災害拠点病院としての役割と、医療強化に向けて

池内　まず、災害大国である日本において、災害医療機能の確保は急務です。当院は武庫川に隣接しているので、水害や地震に伴う津波への対策を考えなければなりません。そのため、免震構造であることはもちろん、診療機能や玄関フロアを2階以上に配置しました。武庫川氾濫時に想定される最大約5メートルの浸水があっても、災害拠点病院として、可能な限り病院機能を維持できるよう整備されています。

髙橋　屋上には新たにヘリポートも設置され、患者さんの受け入れ・移送手段の選択肢が増えました。また、災害時だけでなく、日々の診療でも、患者さんのことを第一に考えた病棟編成になっています。

池内　各建物に分散していた病棟や外来を新病院棟に集約し、診療上の関連性を考慮した病棟編成としました。たとえば消化器では、内科と外科を同じ病棟に配置することで、治療方針に応じて病棟を移ることなく転科できるようになっています。

髙橋　これはとても重要なことで、内科から外科へ治療方針が変わった場合でも、患者さんは同じ病棟で継続して治療を受けることができます。看護師も変わらないため、慣れたスタッフのもとで治療を受けられることは、安心感にもつながるのではないでしょうか。一方で、看護師は内科と外科、どちらの知識も習得していかなければなりません。大学病院で働く看護師として、これまで以上に専門性を高めていく必要があります。

池内　病棟間の移動が少なくなることは、患者さんだけでなく、医療スタッフの負担軽減にもつながります。患者さんを中心に考えることはもちろん、そこで働く人にとっても使いやすい病院であることが大切です。そうした環境づくりにデジタル化も組み合わせながら、「ひとが主役の未来型スマート病院」を実現しています。



02 | 医療人の育成と多職種連携の充実に向けて

池内　新病院棟では、多職種連携と教育機能の充実も重点項目の一つです。学生のうちから多職種連携をより実践的な環境で経験できるよう、各病棟に学生用のスペースを設けました。

髙橋　「ラーニングコモンズ」という名称で、さまざまな専攻の学生が、カンファレンスや情報収集の場として利用できます。これまでのスタッフステーションでは、職員が業務をしている中で学生がゆっくり電子カルテを確認するのは難しかったですからね。

池内　学生だけでなく、われわれスタッフにとっても多職種で連携しやすくなるような工夫が随所に取り入れられています。

髙橋　そうですね。各階に「コミュニティラウンジ」を設け、さまざまな職種が集まり、交流できるマグネットスペースとしました。実は、こうした環境づくりには、現場の職員も参加したのです。職員食堂「むこキッチン」についても、名称をはじめ、椅子やテーブルの配置、自然とのつながりを感じるデザインなど、全職種から人を募って意見を出し合いました。職員食堂は、アプリで事前に注文することもできますし、支払いはすべてキャッシュレス決済です。

池内　職員みんなで新しい病院をつくっていくという意味でも、良い試みだったと思います。当院でもスタッフたちの帰属意識をどう高めていくかはひとつの課題です。新病院棟づくりに職員自身が関わることで、医師や看護師をはじめ、そこで働く人たちが病院への愛着を深めるきっかけになればいいですね。

03 | 地域との連携・共存に向けて

池内　新病院棟には、地域の方にも利用していただける「医大モール」をつくり、レストランやカフェ、コンビニ、美容室を設けました。オープンスペースもあるので、受診以外の目的でも気軽に立ち寄っていただければと思っています。また、駐車場は災害時に近隣住民の避難スペースとしても活用します。地域とのつながりを深めていくことも、当院の大切な役割のひとつですね。

髙橋　地域とのつながりという点では、院内のホスピタルアートもぜひご覧いただきたいと思います。小児科・小児外科外来では、西宮市のキャラクター「みやたん」をデザインした作家さんにお願いし、武庫川にゆかりのある生き物たちをキャラクターにして診察室の扉に描いていただきました。子どもたちが二次元コードでそれぞれの生き物について知ることができる仕組みも取り入れています。産科には職員もデザインに参加したフォトスポットを設け、家族で記念撮影していただくこともできます。また、導入予定のバーチャルホスピタルでは、アバターで病院内を散策したり、AIに質問したりすることもできます。今後はこうしたテクノロジーもうまく活用しながら、人にしかできないことに、より力を注いでいきたいですね。



池内　阪神南地域（西宮市・尼崎市・芦屋市）は約100万人の人口を抱え、大学病院クラスの病院が4つあります。大学病院だからといって、すべての診療領域を同じように高い水準に引き上げていくことは、人材面・資金面からも容易ではありません。それぞれが切磋琢磨しながら、強みを伸ばし、足りない部分は補い合うことで、阪神南地域全体の医療の質を高めていきたいですね。その中で、当院はこれまで以上に患者さんから信頼され、選ばれる病院でありたいと思っています。

繋げ、
兵医の
メッセージ

EMPOWER THE Baton

EMPOWER THE PEOPLE ～心に響く医を、私たちがいる限り～
兵庫医大のスローガンで考える、自分のこと、兵医のこと。

vol. 7



入院手続きのペーパーレス化を推進し、患者さんの手続きの負担や待ち時間を軽減することで、安心して入院できる環境づくりを実現させたいです。



一つの菌を見つけることが、治療・感染予防につながる。新病院棟で、多職種とつながりながら微生物検査の力をさらに高めていきたいです。



開放的なプレイルームをはじめ新しい環境を生かし、子どもたちの可能性を引き出し、ご家族とともに成長と未来を支えるリハビリを実現したいです。



安心して薬物療法が受けられるよう、患者さんや医療者へ適切な薬剤情報の提供を実施し、チーム医療の架け橋となりサポートしていきたいです。



今まで成長してこれたのは、周囲の方々のおかげです。感謝の気持ちをいつも忘れずに。そして、その大切さを後輩にも伝えていきたいです。



学部や大学の垣根を越えて人とつながり、地域や社会で多様な経験を重ね、その学びが周囲や次の世代へ広がる環境をつくりたいです。



今月のバトンテーマは… 新病院棟で実現してみたいことは？

あの人の素顔に迫る。



今月のプロフェッショナル。



医療現場と建設現場の架け橋として、
新病院棟の建設に奔走

01 建設業界における川上から川下へ

工業系の大学で建設を専攻し、卒業後は一貫して建設・不動産に関わる仕事をしてきました。建設業界を川の流れにたとえると、川上から、発注者が行う「企画」、図面を描く「設計」、建物をつくる「建設」、そして完成後の「運営・管理」へと続いていきます。私が最初に入ったのは、その中間に位置する建設（ゼネコン）です。その後、「もっと川上の仕事がしたい」と思い、発注者をサポートするコンサルティング会社へ、さらには発注者自体である不動産会社へと転職しました。こうした経験を重ねるうちに、今度は逆に「建物の管理運営に関わる仕事がしてみたい」と思うようになりました。つまり、川下の仕事ですね。そんな時に本学の施設課員募集にめぐり合いました。建物や設備の維持管理、将来を見据えた計画・更新など、施設を安全に使い続けるための業務に興味を持ち、2017年に入職しました。ところが本学では新病院棟建設プロジェクトが始動しており、私も新病院準備室へ異動することになりました。川下の仕事がしたくて入ったはずが、もっとも川上の位置で仕事をすることになったのです。

02 病院という場所 だからこその難しさ

新病院棟のプロジェクトで私が担った役割のひとつが、医療現場と建設現場との間に立つことでした。建物を設計・施工する人たちは医療現場のことがわかりません。一方、医療現場で働く人たちは建物や工事のことがわかりません。そこで、それぞれの要望を理解し、かみ砕いて、相手に伝わる言葉に置き換える。いわば翻訳者のような役割を担ったのです。たとえば、当初は患者さんの利用を想定していなかった部屋が、患者さんも利用する部屋に変更になったとします。そうなると、患者さんを想定した換気能力に変更する必要があります。感染症の対策を考慮するならば





専用のダクトを設け、排気が他の部屋に流入しないよう計画する必要があります。医療サイドの要望や変更が壁の間や天井の裏側にあるインフラの設計に大きく影響するのです。病院は人の命に関わる場所だからこそ、細心の注意を払って詳細を検討する必要があります。その点が一般的な建物とは異なる、病院ならではの難しさだと感じました。 さらに、設計段階で新型コロナウイルスの感染拡大という事態も重なりました。ポストコロナの病院はどうあるべきか、設計も終盤だったので万全ではありませんが先を見据えた計画も盛り込むことができました。時期がもう少し遅かったら、こうした対応は実現できなかったかもしれません。

03 いよいよ建物を運営・管理する仕事が始まる

このような役割には私がかつて、設計・施工者と発注者との間に立ち、調整を重ねたコンサルの経験が生きていると思います。なかでも心がけているのが、必要なことを短時間で伝える工夫です。医療現場で働く人たちは本当に忙しいので、長々とした説明は避けなければなりません。そのため、理解してほしいところにきちんと目を留めてもらえる資料作りを意識しています。また、メールだけで済ませず、できるだけ顔を合わせて話すことも大切にしています。この秋、新病院棟の開院を迎えました。開院にあたっては「やり遂げた」という晴れやかな気持ちより、「これからが本番だ」という思いのほうが強いですね。建設には万全を期しましたが、それでもやはり、実際に使い始めると思わぬ不具合や改善箇所が出てくるものです。これからは施設課の一員として、完成した建物を運営していく段階に入ります。私も本格的に、「川下」の仕事に取り組む時期がやってきたのです。



清水 愛也 SHIMIZU YOSHIYA

兵庫医科大学
財務企画部
施設課 課長

大阪工業大学工学部建築学科卒業。一級建築士。ゼネコン、建設系コンサルティング会社、不動産会社を経て、2017年、本学に入職。新病院準備室にて新病院棟の建設に携わる。趣味はキャンプ。最近は関西近郊でソロキャンプを楽しんでいる。職場を一歩出ると、オンとオフを切り替えるのが早い。

HYO-INNOVATION

— 明日の医療を支える、知の挑戦 —



社会が、未来がより良くなるために、
いったいどんなことについて
研究しているのだろう。
先生の頭の中、のぞかせてください！



中	村	望	NAKAMURA NOZOMU	兵庫医科大学 生理学 生体機能部門 助教

医学博士。北海道大学大学院医学研究科を修了後、ロックフェラー大学（アメリカ）ポスドク研究員、ルール大学ボーフム（ドイツ）研究員を経て、2015年に兵庫医科大学に着任。日本生理学会評議員、生理学エデュケーター（日本生理学会認定）も務める。専門分野は神経科学、神経内分泌学、呼吸生理学など。

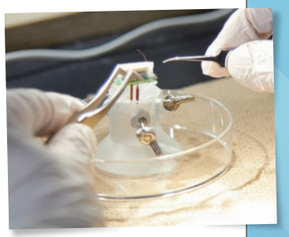
This month's 研究内容

呼吸と記憶の未知なる関係。医療を切り拓く、呼吸の新たな可能性とは

01 “息を吐くタイミングが記憶に影響を与える

一般的に、記憶は脳の働きと結びつけて考えられる。しかし、脳だけではなく、「呼吸」も記憶や認知機能と関係しているのではないか。そう考えて研究を続けてきたのが中村助教だ。

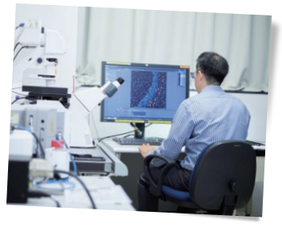
2026年春、中村助教らの研究グループは、記憶と呼吸の関係についての研究成果を発表した。その内容は、「暗記のコツは吐く息後半だった」という見出しのニュースリリースをきっかけに、新聞やWEBメディアに数多く取り上げられ反響を呼んだ。この研究で中村助教らが着目したのは、記憶の「覚える」ステージだ。記憶には、「覚える」「定着させる」「思い出す」という3つの段階があるとし、実験では30人の被験者を対象に、「覚える」段階と「思い出す」段階（実験では「答える」）において、呼吸が回答にどのような影響を及ぼすのかを調べた。その結果、覚える段階でも答える段階でも、「息を吐く後半」において最も速く回答できることがわかった。つまり、呼吸のタイミングが、覚える速さ、その情報を取り出す際の速さに影響するという可能性が示されたのだ。



中村助教は、「声を出して詩や英単語を覚えるのは、息を吐く後半のタイミングになりやすい。音読やシャドーイングの効果が高いのは理にかなっている」と話す。また、この先の展開として、「この結果は筆記テストに限らず、英語のリスニング対策や日常の物忘れ対策、ダンスの振り付けや水泳、ドライビング技術などさまざまな分野におけるパフォーマンスの向上に応用できるかもしれない」と期待を寄せる。

02 “呼吸の作用が疾患の改善につながるのでは？

中村助教が「呼吸」に着目したのはなぜか。その原点には、幼少期から取り組んできたサッカーや空手での経験がある。いずれも対戦相手の動きを瞬時に察知しなければならない。「阿吽の呼吸」という言葉があるように、呼吸を合わせることで相手の動きに同調し、反対に呼吸をずらすことで相手の裏をかく。その経験から「呼吸には何か重要な役割があるのではないか」という考えに至った。もともと脳の研究には、エングラム（記憶痕跡）という概念がある。学習や経験によって形成され、記憶の保持や想起に関わる神経細胞の集まりを指す。近年では、外部からの刺激だけでなく、内部からの刺激によって、こうしたエングラムに変化を与えられることを示す研究が報告されるようになった。中村助教はさらに「そこに呼吸を作用させることで、記憶の構造を書き換えることはできないだろうか」と考えている。呼吸のタイミングを意識的に変化させることで、記憶に関わる神経活動やその後の記憶に変化をもたらせないか、その可能性を探ろうとしているのだ。そうすることで、将来的には、ストレス関連疾患や内分泌系、免疫系に関わる疾患の改善につながるのではないかと考えている。その第一歩として、2023年のマウスを使った実験では、呼吸が実際にエングラムに変化を与えることを示した。2026年には前述した人を対象とした実験に取り組んだ。「同じ呼吸でも動物と人では速さが違う。その違いを利用して、何か新しいことが見えてくるかもしれない」とも話す。そして、これまでの研究を踏まえ、「まだ夢の段階ではありますが」と前置きし、「呼吸を使って病気を治すこと」をイノベーションのテーマに掲げている。



This month's 注目の話題

気になるあの研究トピックスにフォーカス！

HYO-I FOCUS

西宮キャンパス

リキッドバイオプシーにより大腸がん肝転移術後の補助療法の効果が期待される患者群を探索的に検討

CHECK!

医学部 消化器外科学（下部消化管外科）講師 片岡 幸三、国立研究開発法人国立がん研究センター東病院 国際臨床腫瘍科長 吉野 孝之、九州大学病院 先端医工学診療部 教授 沖 英次らの研究グループは、大腸がん術後にctDNA※1を検査する技術（リキッドバイオプシー※2）を用いて再発をモニタリングするGALAXY試験に登録された患者さんの中で、肝転移患者さんに絞った解析を実施しました。大腸がん肝転移術後の患者さんにリキッドバイオプシーを行い、ctDNA陽性の場合に術後補助化学療法を行うことで、全生存期間が延長した一方で、ctDNA陰性の場合に補助化学療法を実施しても全生存期間は延長されず、ctDNAが術後補助化学療法実施の判断に有用な可能性が示唆されました。

※1 ctDNA：血液中にごく微量に存在するがん由来のDNA
※2 リキッドバイオプシー：患者さんの血液を用いてがんのゲノム異常を検出する検査。繰り返し測定可能であるため身体に負担が少なく、がんの再発をより早期に発見できることが期待される

タイトル
Circulating Tumor DNA Status and Adjuvant Chemotherapy in Resected Colorectal Liver Metastases

西宮キャンパス

脳における老廃物除去に関わる酵素L-PGDSの産生を促進する化合物を同定

CHECK!

医学部 先端医学研究所神経再生研究部門 主任教授 中込 隆之、研究講師 土居 亜紀子、医学部 化学 主任教授 福島 和明らの研究グループは、既存の抗うつ薬である「ミルタザピン（Mirtazapine）」が、脳内の老廃物除去や睡眠調節において、重要な役割を果たす酵素「リポカリン型プロスタグランジンD合成酵素（L-PGDS）」の産生を強力に促進することを突き止めました。本研究成果により、脳ペリサイトより産生されるL-PGDSを起点とした新たな治療戦略（脳の老廃物除去による認知機能の改善や脳傷害後の組織修復能の改善、睡眠障害の改善など）への応用が期待されます。

タイトル
Mirtazapine Induces Lipocalin-Type Prostaglandin D Synthase Expression in Brain Pericytes

西宮キャンパス

国内初記録のセノウナガタマムシ大学近くの武庫川河川敷で本学学生が発見

CHECK!

医学部5年生の井藤 将大、京都府立大学 生命環境科学 特別研究員の瑤寺 裕ら4人のグループは、国内初記録となるセノウナガタマムシについて、日本昆虫分類学会の学会誌「Japanese Journal of systematic Entomology」で発表しました。セノウナガタマムシは、これまで台湾にのみ生息するとされていました。2016年に大分県で採集された標本について国内初記録として論文の準備が進められる中、井藤さんが2022年6月、西宮市の武庫川河川敷でも同種を採集したことを連絡。本州にも分布していることが明らかになりました。


瑤寺 裕さん提供

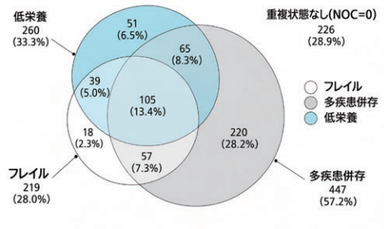
タイトル
Occurrence of Agrilus senohi Tôyama (Coleoptera: Buprestidae) in Japan: Diagnosis, Additional Description, and Sexual Dimorphism of Tarsal Claws

神戸キャンパス

脳卒中発症前のフレイル・多疾患併存・低栄養の重複が予後を左右する

CHECK!

リハビリテーション学部 理学療法学科 准教授 野添 匡史、医学部 社会医学データサイエンス部門 教授 森本 剛、非常勤講師 榊原 史啓らの研究グループは、急性期脳卒中患者を対象とした調査により、高齢者に多く見られる発症前のフレイル、多疾患併存、低栄養という3つの問題の重複に着目して解析した結果、これらの重複数が多いほど、脳卒中発症後1年以内の死亡や心血管イベントのリスクが段階的に高まることを明らかにしました。



タイトル
Overlapping premorbid frailty, multimorbidity and malnutrition and their associations with poor outcomes in patients with stroke

西宮キャンパス

老化関連T細胞が代謝機能障害関連脂肪性肝炎（MASH）の病態を悪化させるメカニズムを解明

CHECK!

医学部 遺伝学 非常勤講師 西浦 弘志、主任教授 大村谷 昌樹、消化器外科学（肝・胆・膵外科）名誉教授 藤元 治朗らの研究グループは独自の新規MASHモデルマウス「NISHIURAマウス」を発見しました。そして、NISHIURAマウスを用いた解析により、加齢に伴う免疫系の異常「老化関連T（SA-T）細胞」が、脂肪肝を進行・重症化させる重要な要因であることを世界で初めて明らかにしました。本研究成果により、これまで困難であった加齢に伴う代謝機能障害関連脂肪性肝炎（MASH）に対する予防法の開発や、SA-T細胞あるいはそれが放出するオステオポンチン（OPN）などの因子を標的とした新たな分子標的治療・創薬研究への道が開かれることが期待されます。

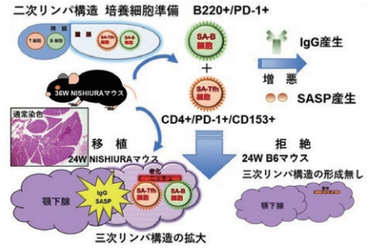
タイトル
Association Between CD4+/Programmed Cell Death 1+/CD153+ Cell Infiltration to the Aging Liver and Progression of Hepatic Steatosis in a Novel Metabolic Dysfunction-Associated Steatohepatitis Model Nishiura Mouse

西宮キャンパス

加齢に伴う免疫細胞の異常がシェーグレン病の病態を悪化させるメカニズムを解明

CHECK!

医学部 遺伝学 非常勤講師 西浦 弘志、主任教授 大村谷 昌樹、糖尿病内分泌・免疫内科学 特別招聘教授 松井 聖らの研究グループはNISHIURAマウスの脾臓および顎下腺において、老化関連免疫細胞（SA-Tfh細胞など）が異所的な「三次リンパ構造（TLS）」を形成し、これが唾液分泌量の低下や構造の破壊を促進していることを突き止めました。さらに、50～70代のヒト臨床検体を用いたレトロスペクティブ研究からも、加齢に伴ってこの細胞の構造の線維化（破壊）を促進する能力が有意に上昇していることを明らかにしました。これまで根本的な治療法がなかったシェーグレン病（SjD）に対するこれまでにない革新的な根本治療薬や、加齢に伴う免疫シグナルを標的とした新たな医療戦略の創出へと繋がることが期待されます。



タイトル
Senescence-associated tertiary lymphoid structures in Sjögren's disease model nishiura mice

TOPICS

TOPICS

新病院棟落成記念式典・内覧会を実施

兵庫医科大学病院は、2026年8月29日・30日の2日間、新病院棟落成記念式典・内覧会を開催しました。式典には関係者が出席し、新病院棟の完成を祝うとともに、今後の診療・教育・研究のさらなる発展を願いました。内覧会では、新たに整備された診療・教育環境を公開。地上15階建て、801床を備える新病院棟には、学生が利用できる教育スペースも各階に設けられ、IPE（多職種連携教育）を推進します。また、デッキ棟を介して大学施設と医療施設を隣接して配置し、スムーズな移動を可能にすることで、教育・研究・診療のさらなる連携を図ります。

8.29 SAT

新病院棟落成記念式典・昼食会・内覧会

- 開式の辞
- 主催者挨拶
  学校法人兵庫医科大学 理事長 太城 力良
- 来賓祝辞
  文部科学省 高等教育局 医学教育課長 日比 謙一郎 様
  兵庫県知事 齋藤 元彦 様
- 特別講演「これからの大学病院に期待するもの」
  厚生労働省 医政局長 佐々木 昌弘 様
  座長 兵庫医科大学 副理事長 野口 光一
- 新病院棟紹介「新病院棟誕生までの歩み」
  学校法人兵庫医科大学 常務理事兼新病院準備室長 阪上 雅史
- 閉式の辞
  兵庫医科大学 学長 鈴木 敬一郎





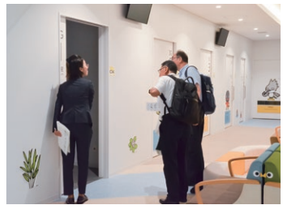

8.30 SUN

内覧会 卒業生などを対象

内覧会ルート

- 1F：受付　医大モール
- 15F：病室（特別病棟）
- 9F：病棟（小児科ホスピタルアート）　ラーニングコモンズ　コミュニティラウンジ
- 4F：がんセンター　採血室等
- 3F：外来ストリート　小児科・小児外科外来　ホスピタルアート　内視鏡センター
- 2F：エントランスホール　受付エリア　放射線診断エリア




TOPICS

新病院棟の開院に向けて
本番を想定したリハーサルを実施

01 患者さんの安全な移送を想定したリハーサルを実施

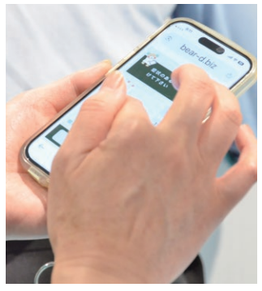


2026年8月8日、新病院棟への移転に向け、患者さんの安全かつ円滑な移送を想定したリハーサルを実施しました。このリハーサルは7月に続く第2回目の実施となりました。第1回目のリハーサルで確認された課題や改善点を踏まえて実施したことで、前回よりもさらにスムーズな連携が可能となり、患者さんを安全に移送するための手順をより確実なものとすることができました。



また、移送中の安全確保や職員同士の情報共有など、実際の移転を想定した確認を重ねることで、移転当日に向けた準備を一歩前進させる機会となりました。

02 新病院棟電子カルテ運用リハーサルを実施



2026年8月8日、新病院棟への移転に向け、電子カルテ運用リハーサルを実施しました。今回のリハーサルでは、移転後の実際の運用を想定し、患者さんの動線や電子カルテの更新に伴う影響範囲を確認しました。また、診療の流れを検証しながら課題を洗い出し、新病院棟での円滑な診療に向けた準備を進めました。新病院棟では、記入項目の多い初診時の問診票を、ご自宅からスマートフォンなどで事前に入力できるシステムを導入しています。また、ホスピジョン（外来患者案内・待ち順番表示システム）を全診療科および処置室に対応させるなど、患者さんの利便性向上を図っています。



03 ヘリコプターを用いた救急搬送訓練を実施

2026年8月20日、兵庫医科大学病院と西宮市消防局は、ヘリコプターを用いた救急搬送訓練を実施しました。登山中の男性が約5メートル滑落し、骨盤や足を骨折した疑いがあるとの想定で、搬送訓練を実施。



西宮市消防局の隊員と救命救急センターの医師・看護師らが連携し、屋上ヘリポートへの着陸から傷病者の引き継ぎ、救急エレベーターを使用した院内搬送まで、一連の手順を確認することができました。訓練には関係者約50名が参加しました。



NEWS

兵医の気になるニュース

医科大

丹波篠山市より 地域医療への貢献に対する感謝状を受領

CHECK!





2026年7月2日、ささやま医療センター等の経営移譲に伴い、長年にわたる地域医療への貢献に対する感謝の意として、丹波篠山市の酒井 隆明 市長より、理事長 太城 力良に感謝状が手渡されました。また、丹波篠山市の上田 英樹 市議会議長より「学校法人兵庫医科大学ささやま医療センターに関する感謝決議」の決議書が贈呈されました。丹波篠山市議会において「感謝決議」が可決されるのは今回が初めてです。

医科大

学校法人兵庫医科大学による 三好病院等の事業承継について



学校法人兵庫医科大学は、医療法人芳恵会が運営する「三好病院」および「三好病院介護医療院」の事業承継に向けた準備を進めています。本件は、地域医療提供体制の維持・充実を目的とするものです。高度急性期医療と地域に根ざした医療・介護機能を融合し、急性期医療から在宅復帰まで切れ目なく支える地域医療体制の構築を目指します。

CHECK!

大学病院

「Elekta Evo リニアックシステム」 日本初治療を開始へ



当院は、日本で初めて高精度放射線治療装置「Elekta Evo（エレクタ エボ）リニアックシステム」を導入しました。日常診療から高度ながん治療まで幅広く対応する次世代の放射線治療装置で、AIを活用した高精細イメージング技術「Iris（アイリス）」により、体内の臓器位置を明瞭に可視化。患者さんの状態変化に応じた、より精密で安全性に配慮した放射線治療の実現に貢献します。

医科大

高校生が医療現場で 作業療法の仕事を体験



2026年8月20日、兵庫医科大学病院にて、高校生を対象とした「作業療法室見学ツアー」を開催しました。年2回実施している体験型企画で、作業療法室の見学やリハビリテーション用ロボットの操作体験を通じて、現役の作業療法士から仕事内容や役割を学びました。参加者にとって、実際の医療現場に触れることで、作業療法士の仕事の魅力や将来の進路について考える貴重な機会となりました。

医科大

若手研究者の優れた成果を顕彰 2025年度学術賞受賞者が決定



国際的な評価が高い研究を行った研究者に対して学術賞を授与しました。この賞は若手研究者の研究の奨励を目的としており、教員および大学院生に贈られます。

▼受賞者（所属・役職は受賞時のもの）
［教員］医学部 解剖学神経科学部門 助教 段 韶琪（写真）
［教員］薬学部 講師 伊藤 都裕
［大学院生］医科学専攻 高次神経制御系 整形外科学 赤井 俊介
［大学院生］医科学専攻 器官・代謝制御系 消化管疾患学 池ノ内 真衣子

大学病院

熊本県へDMAT隊を派遣



2026年7月28日に発生した熊本地震を受け、8月2～5日までの4日間、当院のDMAT隊（医師1名、看護師2名、業務調整員1名の計4名）が熊本県へ派遣され、熊本県央南活動拠点本部内の「活動指揮」部門に従事し、現地で活動するDMAT隊の管理や指示・調整などを担いました。各DMAT隊が円滑に活動できるよう支援するとともに、被災地域の医療支援に尽力しました。

医科大

2025年度BPRプロジェクト 表彰式・活動報告会を開催



2026年7月10日、「2025年度BPR推進プロジェクト表彰式・活動報告会」を開催しました。BPRとは、既存の業務プロセスを見直し、効率化や質の向上を図る取り組みです。2025年度は事務局各部署が全78課題に取り組み、その中から「入院請求業務における業務量の可視化および業務効率化」「Pre-CC OSCEにおける評価表入力のシステム化」など4課題が表彰されました。

医科大

科学研究費助成事業申請 支援セミナーを開催



2026年7月16日、医学部 生化学 主任教授 塚本 蔵による「科研費は作文力だけでは取れない―研究室で採択を支える準備・指導・研究実績―」と題したセミナーを開催しました。会場71名、オンライン60名が参加。研究者・指導者・審査員それぞれの視点から科研費獲得に必要な心構えや作成ポイントについて講演しました。

CHECK!

大学病院

病院ボランティア連絡会を開催



2026年8月17日、2026年度第1回ボランティア連絡会を開催しました。コロナ禍の影響で開催を見合わせていたため、2019年以来7年ぶりの開催となります。当日は、活動時間500時間を超えたボランティアの皆さまへ感謝の意を込めた表彰式を実施。懇親会では参加者の皆さまと意見交換を行い、貴重なご意見をいただきました。閉会後は新病院棟の見学を行い、院内の様子をご覧いただきました。

医科大

研究者倫理講習会を開催



東北大学大学院 文学研究科 田代 志門 教授を講師に迎え、「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」をテーマとしたオンライン講演会を開催しました。2026年12月1日に施行される改正倫理指針の内容を中心に、研究者や研究支援に携わる職員が理解を深め、適正な研究活動の推進と臨床研究の発展につなげることを目的として実施しました。

西宮キャンパス

2026年度 第1回武庫川漢方カンファレンスを開催



2026年7月31日、「2026年度第1回武庫川漢方カンファレンス」を開催しました。「IBD（炎症性腸疾患）×漢方 ―大建 中湯・柴苓湯の可能性―」をテーマに、本学 教授 内野 基による一般講演、JCHO東京山手メディカルセンター 炎症性腸疾患内科 酒匂 美奈子 部長による特別講演が行われ、手術治療や最新の診断・治療における漢方薬の役割が紹介されました。

INFORMATION

法人からのお知らせ

2026年度 研究費 交付・配分状況一覧

2026年度 科学研究費助成事業 交付状況一覧（2026年9月1日現在）

研究種目	新規（単位：件）	継続（単位：件）	交付件数（単位：件）	交付総額（単位：円）
新学術領域研究	0	0	0	0
基盤研究（S）	0	0	0	0
基盤研究（A）	0	1	1	10,660,000
基盤研究（B）	2	13	15	76,050,000
基盤研究（C）	41	114	155	204,890,000
挑戦的研究（開拓）	0	0	0	0
挑戦的研究（萌芽）	0	1	1	2,080,000
研究活動スタート支援	1	2	3	4,680,000
若手研究	8	30	38	44,980,000
奨励研究	5		5	2,320,000
合計	57	161	218	345,660,000

2026年度 厚生労働科学研究費補助金 交付状況一覧（2026年9月1日現在）

（単位：円）

研究事業名	研究課題名	研究代表者	交付総額
エイズ対策政策研究事業	HIV感染血友病患者の救急対応の課題解決のための研究	医学部 血液内科学　日笠 聡	9,100,000
合計（1件）			9,100,000

2026年度 日本医療研究開発機構研究費 配分状況一覧（2026年9月1日現在）

（単位：円）

研究事業名	研究開発課題名	研究代表者	交付総額
難治性疾患実用化研究事業	サルコメア構造と収縮性を回復させる 新規特発性拡張型心筋症治療薬の開発	医学部 生化学 塚本 蔵	26,000,000
研究倫理・社会共創推進プログラム	公正な臨床研究の基盤となる解決型事例教材と 研究計画・解析ネットワークの普及に関する研究開発	医学部 社会医学 データサイエンス部門 森本 剛	7,800,000
再生・細胞医療・遺伝子治療 実現加速化プログラム	代謝的成熟性を獲得したiPS心筋細胞を利用した 遺伝性肥大型心筋症の心筋エネルギー代謝異常の解析	医学部 生化学 塚本 蔵	16,900,000
次世代ヘルステック・ スタートアップ育成支援事業	AI画像解析による体幹採寸支援システムの研究開発と 装具製作デジタルワークフローの構築	医学部 リハビリテーション医学 中川 真一	17,340,000
合計（4件）			68,040,000

2026年度 その他競争的研究費等 配分状況一覧（2026年9月1日現在）

（単位：円）

研究事業名	研究課題名	研究代表者	交付総額
PFASに関する総合研究（環境省）	免疫疾患におけるPFASの免疫抑制および 免疫促進影響の解明に向けた実験的検証	医学部 免疫学 黒田 悦史	30,000,000
合計（1件）			30,000,000

新病院棟見学会・記者懇談会を開催

2026年8月27日、新聞・テレビ・Webメディアなどの報道関係者を対象に、新病院棟見学会・記者懇談会を開催しました。当日は、新病院棟の概要や災害医療への対応について説明したほか、設計を担当した事業者から建物の特徴や設計上の工夫について紹介がありました。その後、報道関係者の皆さんとともに施設内をめぐり、新病院棟の各所を詳しく紹介しました。

スケジュール

懇談会 1時間

- ご挨拶
  理事長 太城 力良／学長 鈴木 敬一郎／病院長 池内 浩基
- 新病院棟開院の背景と目的
  常務理事兼新病院準備室長 阪上 雅史
- 新病院棟における災害医療体制について
  病院長 池内 浩基
- 災害医療機能の確保にかかる設計段階からの取り組みについて
  株式会社久米設計



見学会 2時間

地下 → 屋上 → 15F → 8F → 7F → 3F → 2F → 1F

- 地下：免振ピット
- 屋上：ヘリポート
- 15F：特別病棟／スタッフルーム／ラーニングコモンズ
- 8F：熱源機械室／電気室
- 7F：むこキッチン
- 3F：ホスピタルアート／外来ストリート
- 2F：エントランスホール
- 1F：フォトンカウンティングCT／リニアック／医大モール

新病院棟開院に関するメディア掲載実績一覧（抜粋）

メディア掲載一覧はこちら

メディア名	タイトル	媒体	日付
サンテレビ	兵庫医科大学病院の新病棟を公開 9月24日開院	テレビ	8月27日
朝日新聞朝刊	兵庫医大に新病院棟　来月24日 災害対応を強化	新聞	8月28日
読売新聞朝刊	国内初の最先端治療装置　来月開院新病院棟を公開	新聞	8月28日
神戸新聞朝刊	来月24日開院予定の兵庫医科大新病院棟　外来や病棟集約、機能強化　南海トラフ想定し免震構造採用	新聞	8月28日
日刊建設工業新聞朝刊	新病院棟が完成　兵庫医科大、西宮キャンパスに15階7．3万平方メートル　設計は久米設計、施工は鹿島	新聞	8月28日
建設通信新聞朝刊	ひと中心の病院目指す　兵庫医科大の新病院棟 施工は鹿島	新聞	8月28日
産経新聞朝刊	救急・災害体制強化　新病棟公開 最新CTなど導入	新聞	8月29日
神戸新聞朝刊	兵庫医科大新病院棟が24日オープン　外来など集約、患者負担を軽減　院内各所にホスピタルアート　不安や緊張和らげる	新聞	9月3日
m3.com	兵庫医大が801床の新病院棟、9月24日開院へ他（全5回）	電子	9月3日
阪神沿線活性化WEB『エンカチ』	9月24日に開院！兵庫医科大学病院の「新病院棟」に行ってみた@武庫川	電子	9月11日
神戸新聞朝刊	兵庫医大病院 引っ越し　患者250人、あす新棟開院	新聞	9月23日
毎日新聞朝刊	兵庫医科大新病棟　開院　きょうから　災害対策強化、アートも　／兵庫	新聞	9月24日
Lmaga.jp	【きょうオープン】「タリーズがあるからこの病院に…」兵庫医科大学病院に、全66席のカフェやローソン集まる"医大モール"誕生	電子	9月24日
西宮つーしん	兵庫医科大学に新しい病棟できてる。都会の高層ビルみたい	電子	9月24日